

# 中華人民共和國教育部制定『義務教育 音楽課程標準（2011年版）』

Curriculum Standard of Music (2011) for Compulsory Education" by the Ministry of Education in the People's Republic of China

李 林璇 LI Linxuan (大学院地域学専攻人間形成コース 1年)

鈴木 慎一郎 SUZUKI Shinichiro (教授 学習科学講座)

キーワード：中華人民共和國 the People's Republic of China, 音楽課程標準 Curriculum Standard of Music, 義務教育 Compulsory Education

1949年、中華人民共和國（以下、中国、と略記）の成立以来、1950年、1956年、1982年、1988年、1992年に「小学校音楽教学大綱」が改訂された<sup>1</sup>。これらの時期では、国が教育課程の編成や授業時数を規定した「課程計画」、各教科の目的や内容等を規定した「教学大綱」を策定し、それに準拠した全国統一の国定教科書（人民教育出版社）を発行してきた。

1986年には「義務教育法」が制定され、「美育」の一つの科目とされた音楽科は小学校の必修科目となる。

1999年から、15カ年計画の基礎教育課程改革が開始され、「応試教育」から「素質教育」へと転換される。2001年、「基礎教育課程改革綱要（試行）」が發布され、①知識の記憶からの脱却、②学科の統合、③内容の構築原理、④体験・経験の重視、⑤評価の改革、⑥国家課程、地方課程、学校課程の分権を推進が目標とされる<sup>2</sup>。同年、『義務教育 音楽課程標準』が制定される。これについては、孟艷・奥忍によって翻訳された資料がある<sup>3</sup>。

2011年、『義務教育 音楽課程標準』が改訂される<sup>4</sup>。以下、日本語への翻訳を試み、資料としたい<sup>5</sup>。

## 目次

### 第一部分 前書き

- 一 課程の性質
- 二 課程の基本理念
- 三 課程設計の構想

### 第二部分 課程の目標

- 一 総目標
- 二 学段の目標

### 第三部分 課程の内容

- 一 感受と鑑賞
- 二 表現
- 三 創造
- 四 音楽と関連文化

### 第四部分 実施と提案

- 一 教育の提案
- 二 評価の提案
- 三 教材の作成提案

## 四 課程資源の開発と利用提案

### 音楽課程標準

#### 第一部分 前書き

新中国が成立して以来、中国の小中学校の音楽教育は大きな成績を収めた。特に美育が国家の教育方針に掲げられた後、音楽の教育事業は急速に発展した。教育の改革を深化させ、素質教育を全面的に推進し、教育の公平を促進し、教育の持続的かつ健全な発展を実現するために努力する背景の下で、本標準の制定は、社会主義の中核的価値体系を堅持することを導きとし、児童・生徒の良好な審美情緒と人文素養を育成するために重要な役割を果たしている。

音楽は人類の最も古く、最も普遍性と感染力のある芸術形式の一つで、人類が組織的な音響を通じて思想と感情の表現と交流を実現するには欠かせない聴覚芸術であり、人類の精神生活の有機的な構成部分である。人類文化の一種の重要な形態と担体として、音楽は豊富な文化と歴史の内包を含み、その独特な芸術の魅力で人類の歴史の発展に伴って、人々の精神文化の需要を満たす。音楽に対する感受、表現と創造は、人類の基本的な素質と能力である。音楽課程の価値は、児童・生徒に審美の体験を提供し、情操を陶冶し、知恵を啓発することにある。創造的な発展の潜在能力を開発し、創造力を向上させ、民族の優秀な文化を伝承し、世界の音楽文化の豊富性と多様性に対する認識と理解を増進する。人間関係、感情コミュニケーション、調和のとれた社会の構築を促進する。

#### 一 課程の性質

音楽課程は九年間の義務教育段階で全て児童・生徒向けの必修科目であり、音楽課程の性質は主に以下の三つの面に現れている。

##### 1. 人文性

音楽は文化の重要な構成部分であり、人類の貴重な精神文化遺産と知恵の結晶である。文化の中の音楽から出発しても、音楽の中の文化の視点から出発しても、音楽課程の中の芸術作品と音楽活動は、いずれも異なる文化身分の創作者、演技者、伝播者と参加者の思想感情と文化の主張を注入し、異なる国家、異なる民族、異なる時代の文化発展

の脈絡と民族性格、民族感情と民族精神の表現であり、鮮明かつ深刻的な人文性を有する。

## 2. 審美性

「美を以て人を育む」教育思想は中国の教育、文化伝統と脈々と受け継がれ、徳・智・体・美（道徳、智力、体力、審美）を全面的に発展させる社会主義建設者と後継者を育成する教育方針の有機的な構成部分である。音楽教育を通じて、児童・生徒の感受美、表現美、鑑賞美、創造美の能力を育成、向上させ、情操を陶冶し、個性を発達させ、知恵を啓発し、イメージ思考を豊かにし、発達させ、革新意識と創造能力を奮い立たせ、児童・生徒の素質を全面的に向上させる。

## 3. 実践性

音楽音響は語義の確定性と事物形態の具象性を持たない。音楽課程の各分野の教育は、聴く、歌う、演奏、総合的な芸術表現、音楽創作など多様な実践形式を通じてしか実施できない。児童・生徒は自らこれらの実践活動にする過程で、音楽に対する直接的な経験と豊富な感情体験を獲得し、音楽に関する知識と技能を掌握し、音楽の内包を悟り、音楽の素養を高めるために良好な基礎を築く。

## 二 課程の基本的な理念

### 1. 音楽審美を核心とし、興味・愛好を原動力とする

音楽審美とは、音楽芸術の美感を体験、悟り、コミュニケーション、交流及び異なる音楽文化の文脈と人文の内包に対する認知を指す。この理念は中国の数千年の優秀な音楽文化の伝統に立脚し、中国の教育方針における「美育」に対応し、音楽課程が潜在的な暗黙化の中で児童・生徒の素晴らしい情操を育成し、人格を健全にし、美を以て人を育む機能を明らかにした。音楽の感情体験は、多様化した文化の文脈から出発し、音楽芸術の表現特徴に基づき、児童・生徒の音楽表現形式に対する全体的な把握を導き、音楽要素の音楽表現における役割を理解し、音楽素養を増進しなければならない。音楽の基礎知識と基本技能の学習は、音楽芸術の審美体験と異なる文化認知と有機的に結合しなければならない。

興味は音楽学習の根本的な原動力と生涯音楽を愛する必要な前提である。教育の中で、児童・生徒の心身の発展の法則に基づいて、多彩な教育内容と生き生きとした教育形式で、児童・生徒の音楽に対する興味を奮い立たせ、絶えず音楽の素養を高め、精神生活を豊かにしなければならない。

### 2. 音楽実践を強調し、音楽創造を奨励する

音楽教育は音楽芸術の実践過程である。そのため、すべての音楽教育分野は児童・生徒の芸術実践を強調し、児童・生徒を積極的に導き、歌う、演奏、聴き、総合的な芸術表現と即興創作などの各音楽活動に参加させ、それを児童・生徒が音楽に入り、音楽審美体験を得る基本的なルートとしなければならない。音楽芸術の実践を通じて、効果的に音楽の素養を高め、児童・生徒の音楽表現の自信を強

め、児童・生徒の良好な協力意識とチームワーク精神を育成する。

音楽は創造性に富む芸術である。小中学校の音楽課程における音楽創造の目的は、音楽を通して児童・生徒のイメージ思考を豊かにし、児童・生徒の潜在質を開発することにある。教育の過程で、生き生きと面白い創造的な活動内容、形式とシナリオを設定し、児童・生徒の想像力を発達させ、児童・生徒の創造意識を強化しなければならない。

### 3. 音楽の特点を際立たせ、学科の総合に注目する

音楽は聴覚芸術であり、児童・生徒は主に聴覚活動を通じて音楽を感受し、体験する。音楽の音響は時間の流れに従って現れて、語義の確定性と事物の形態の具象性を持たない。しかしそれはまた人類の社会生活、各種の文化芸術と緊密な繋がりを持ち、これは児童・生徒たちが音楽と想像力を感受、表現し、創造力を発揮するために広大で自由な空間を提供した。同時に、音楽芸術の時間性、表現性と感情性の特徴にも注目し、教育過程で強調し、体現しなければならない。

音楽教育の学科総合は、音楽課程の異なる教育分野間の総合と、音楽と詩歌、舞踊、演劇、映画・テレビ、美術などの異なる芸術分類の総合と、音楽と芸術以外の他の学科との総合を含む。教育の中で、学科の総合は音楽芸術の特点を際立たせ、具体的な音楽材料を通じて他の芸術分類と他の学科との有機的な繋がり構築し、総合過程で異なる芸術分類の表現形式を比較し、児童・生徒の芸術視野を広げ、児童・生徒の音楽芸術に対する理解を深めなければならない。

### 4. 民族音楽を発揚し、音楽文化の多様性を理解する

中国の各民族の優秀な伝統音楽を音楽教育の重要な内容とするべきである。学習を通じて、児童・生徒は祖国の音楽文化を熟知、愛好し、民族意識を強め、愛国主義情操を育成する。時代の発展と社会生活の変遷に伴い、近現代と現代社会生活を反映する優秀な中国音楽作品も音楽授業の教育内容に組み入れなければならない。

世界の平和と発展は異なる民族文化に対する尊重と理解に頼り、広い視野で世界の他の国と民族の音楽文化を学び、音楽文化の多様性を理解し、人類文明の全ての優秀な成果を共有しなければならない。

### 5. 児童・生徒全体に向けて、個性の発展を重視する

義務教育段階の音楽授業は、児童・生徒全体に向けて、児童・生徒一人一人の音楽潜在能力を開発し、そこから利益を得なければならない。音楽の授業の全ての教育活動は児童・生徒を主体とし、教師と児童・生徒が相互作用し、児童・生徒の音楽に対する感受と音楽活動の参加を重要な位置に置くべきである。

児童・生徒の個性を尊重し、児童・生徒が積極的に各種の音楽活動に参加することを奨励し、自分の方法で情知を表現する。教育の中で、全体の児童・生徒の普遍的な参加と異なる個性発展を有機的に結びつけさせ、生き生きとし

た、柔軟で多様な授業形式を創造し、児童・生徒が音楽を  
発展させるために空間を提供しなければならない。

### 三 課程の設計の構想

1. 音楽課程の美育機能を際立たせ、音楽活動方式で教育分  
野を区分する

2001年以前、中国の小中学校の音楽教室の教育内容は、  
歌う（小学校低学年は「歌遊」が加わった）、鑑賞、器楽、読  
譜など4つの項目を含めていた。時代の進歩と学科の発展  
に伴い、音楽課程の美育機能を際立たせるために、音楽課  
程の人文属性と児童・生徒の創造性潜在能力開発の課程価  
値を強調し、本標準は既存の音楽課程の教育内容を「感受  
と鑑賞」と「表現」2つの教育分野に統合した。教育に隠さ  
れていた音楽文化の知識と分散した音楽制作活動を集中  
し、「創造」と「音楽と関連文化」の2つの分野に広げ  
た。上記の4つの教育分野は相互に関連、浸透し、有機的  
な全体を構成している。新しい教育分野の区分は、本学科  
の21世紀の発展傾向と本課程の性質と基本理念を体現して  
いるだけでなく、児童・生徒の発展を促進するのに有利で  
あり、課程の実施難易度を増加させない前提の下で、伝統  
的な音楽教室の教育内容と安定したドッキングを実現させ  
ている。

2. 豊富な音楽実践活動を設計し、児童・生徒を積極的に参  
加させる

音楽芸術の審美体験と文化認知は、生き生きと多様な音  
楽実践活動の中で、児童・生徒の自らの参加を通じて生成  
され、実現されている。そのため、音楽課程は音楽の聴  
き、表現と創作の三つの実践性の強い教育分野に対し  
て、相対的に明確的で具体的な課程の内容を提出し、そし  
て音楽の学習の特徴から出発して、生き生きとした教育形  
式を設計し、児童・生徒の学習の興味を奮い立たせ、児童  
・生徒の音楽に対する愛好を増進させて、児童・生徒を導  
いて自発的に各音楽の実践活動に参加し、音楽に対する体  
験を得る。絶えず実践する過程で、児童・生徒の一生の発  
展に有利な音楽能力を徐々に育成し、向上させる。

3. 音楽知識及び技能の学習と審美体験と文化認知の関係を  
正しく処理する

音楽の音響材料、創作過程と表現形式には特殊性があ  
り、これらの芸術特徴は聴き、表現と創作教育を決定し、  
必然的に特定の知識と技能の要求を含む。音楽課程の設計  
は、この客観的な学科の規定性を直視し、課程中の音楽知  
識及び技能の学習と審美体験と文化認知能力の発展の関  
係を正しく処理しなければならない。音楽知識及び技能の学  
習と達成すべき標準を強調することは、児童・生徒の審美  
体験、芸術表現と文化認知を発展させる基礎であり、それ  
自身が児童・生徒の音楽素養の構成部分である。

4. 児童・生徒の異なる年齢層の心理発達レベルと音楽認知  
特徴に基づき、学段（学年別に階段のように分けて）を分  
けて、漸進的課程目標と相応の課程内容を設置する

義務教育段階は、児童と青少年の生理・心理の急速な  
発展期であり、人生が音楽教育を受け、音楽素養を増進

し、心身の健全な発展を促進する重要な時期でもある。音  
楽課程を児童・生徒の心理発達レベルと音楽認知特徴に適  
応させるために、音楽課程は義務教育段階の9学年を小学  
校の低学年（1~2年生）、小学校の中、高学年（3~6年生）、中  
学校各学年（7~9年生）の3つの段階に分けた。異なる学段の  
児童・生徒の生理・心理の発展の違いと音楽学習認知の特  
徴を分析した上で、課程の総目標の統括の下で、各段階の  
目標を明らかにし、これを異なる学段、異なる教育分野の  
課程内容設計の基本的な根拠とする。3つの学段の異なる階  
層の課程内容は、前後の繋がり、段階ごとに進み、完全に  
秩序ある内在的なつながりを示す。

5. 授業内容の設計は、明確な規定性と適度な弾力性の間に  
バランスを求め、教師の教育と地域の音楽課程資源の開発  
に創造と選択運用の空間を残す

中国の広範な都市と農村の異なる地域の経済、文化環境  
と発達レベルの違いは、客観的に学校の音楽教育の実施状  
況と教育レベルに影響を与えている。このよう現実に基づ  
き、音楽課程に広範な適応性と普遍的な実行可能性を持た  
せるために、課程内容と標準の設計に対して、明確な規定  
性があるだけでなく、適度な弾力性と一定の選択性があ  
り、異なる地域、異なる学校の音楽課程を、同じまたは近  
い内容とレベルの要求の上で普遍的に実施することに注意  
しなければならない。音楽教育の普及と均衡発展を推進す  
る。

## 第二部分 課程の目標

### 一 総目標

児童・生徒は音楽課程を学習と多様な芸術実践活動を参  
加することによって、音楽の芸術魅力を探究、発見、理解  
し、児童・生徒の音楽に対する持続的な興味を育成し、美  
感を涵養し、心身を調和させ、情操を陶冶し、人格を健全  
にする。必要な音楽の基礎知識と基本技能を学び、掌握  
し、文化視野を広げ、音楽聴覚と鑑賞能力、表現能力と創  
造能力を発展させ、基本的な音楽素養を形成する。感情体  
験を豊かにし、良好な審美情緒と積極的で楽観的な生活態  
度を育成し、心身の健全な発展を促進する。上記課程の目  
標は次の3つの次元で記述する。

#### 1. 感情・態度・価値観

①感情体験を豊かにし、生活に対する積極的で楽観的な態度  
を育成する

音楽の学習は児童・生徒の感情の体験を豊かにすること  
ができて、その感情の世界に潜在的な暗黙化の感動と薫陶  
を受けさせて、人類、自然、すべての素晴らしい事物に対  
する関心・愛護の感情を創出して、更に生活に対する積極  
的な楽観的な態度と素晴らしい未来に対する憧れと追求を  
育成する。

②音楽に興味を持ち、生涯学習の願望を立てる

各種の有効なルートと方式を通じて児童・生徒を音楽に  
導き、自ら音楽活動に参加する過程で音楽を愛好するにな  
り、音楽の基本的な知識と基本的な技能を掌握して、次第

に音楽を鑑賞する良好な習慣を身につけて、生涯を通じて音楽を愛好するようになるために基礎を築く。

### ③音楽の審美能力を高め、高尚な情操を陶冶する

児童・生徒の音楽作品に対する情緒、格調、人文の内包に対する感受と理解を訓練することを通じて、児童・生徒の音楽の鑑賞能力を育成し、健康的な審美情緒を育成して、真・善・美の芸術世界で高尚な情操の陶冶を受けさせる。

### ④愛国主義の感情を育成し、集団主義の精神を強める

音楽作品の中で表現された祖国の山河、人民、歴史、文化と社会発展に対する賛美を通じて、児童・生徒の愛国主義感情を育成する。音楽実践活動の中で、児童・生徒の良好な行為・習慣と寛容な理解、相互尊重、共同合作の意識を育成し、集団主義の精神を強める。

### ⑤芸術を尊重し、世界文化の多様性を理解する

芸術家の創造労働を尊重し、芸術作品を尊重し、音楽芸術を鑑賞する習慣を身につける。母語音楽文化と異なる民族、異なる国家、異なる時代の作品を系統的に学びことを通じて、音楽中の民族風格と感情を感知し、異なる民族の音楽伝統を理解し、中華民族の音楽文化を愛好し、世界の他の民族の音楽を学び、音楽文化の多様性を理解する。

## 2. プロセスと方法

### ①体験

完全で十分に音楽作品を聴き、音楽の体験と感受の中で、音楽の審美過程の喜びを享受し、音楽の感性的特徴と精神的内包を体験し、理解する。

### ②模倣

自ら歌う、演奏、創作などの芸術実践活動を参加し、現地で観察、比較、練習などの方法を適切に運用して模倣し、感性的な経験を蓄積することによって、音楽表現と創造能力を更なる発達のために基礎を築く。

### ③探究

児童・生徒の音楽に対する好奇心と探究願望を育成し、自主学習の探究過程を重視し、児童・生徒にアドリブ式の自由発揮を主な特徴とする探究と創作活動に積極的に参加させる。

### ④提携

音楽芸術の集団演技形式と実践過程において、他人と十分に交流し、密接に協力し合うことができれば、集団意識と協調能力を絶えずに強化することができる。

### ⑤総合

音楽を主線とする芸術実践を通じて、他の芸術表現形式と関連学科の知識を浸透、運用し、音楽の意義と人類芸術活動における特殊な表現形式と独特の価値をよりよく理解する。

## 3. 知識と技能

### ①音楽の基礎知識

音楽の基本要素(例えば強弱、速度、音色、リズム、拍、旋律、調、和音の響きなど)、よく見られる音楽構造、音楽

のジャンル・形式、風格・流派、及び歌う、演奏、読譜、創作などの音楽の基礎知識を学び、掌握する。

### ②音楽の基本的な技能

歌う、演奏、創作の初歩的な技能を習得し、自信、自然、表情を籠めた歌うと授業内容の楽器を演奏することができ、音楽創作の基本的な方法を理解する。音楽聴覚・知覚に基づいて楽譜を読み、音楽実践活動において読譜の技能を運用する。

### ③音楽の歴史と関連文化の知識

中国と諸外国の音楽の発展の簡単な歴史と代表的な音楽家を理解し、異なる時代、異なる民族の音楽を初歩的に識別する。音楽と姉妹芸術(美術、ダンスなど)の繋がりを認識し、異なる芸術分類の主要な表現手段と芸術形式の特徴を感知し、音楽と芸術以外の他の学科との繋がりを理解し、音楽文化の視野を広げる。自分の生活経験と学んだ知識に基づいて、音楽の社会機能を認識し、音楽と社会生活の関係を理解する。

## 二 学段の目標

義務教育段階の9学年は3つの学段に分けられ、各段階の課程目標は以下のように記述される。

### 1. 1-2学年

この学段の児童・生徒はイメージ思考を主とし、好奇心があり、よく動き、模倣力の強い心身の特徴に十分に注意し、巧みに子どもの自然な発声と器用な体を利用し、歌、ダンス、絵、ゲームなどを結合した総合的な手段を採用することによって、直観的な教育を行う。音楽を聴く材料は短くて面白く、音楽のイメージが鮮明でなければならない。

- ・児童・生徒が音楽に興味や関心を奮い立つように導いてあげる。

- ・音楽の知覚・感受力を開発し、音楽の美しさを体験する。

- ・自然に表情的な歌うことができ、他の音楽表現やアドリブ活動に参加することができる。

- ・楽観的な態度と友愛の精神を育成する。

### 2. 3-6学年

生活範囲や認知分野が更に広がるにつれて、児童・生徒の体験感と探索創造の活動能力が強まってくる。児童・生徒の音楽に対する全体的な感受を導くことに注意し、授業曲目のジャンル、形式を豊かにし、合唱、楽器演奏及び音楽創造活動の分量を増加し、生き生きとした教育形式と芸術の魅力で児童・生徒を引きつける。本学段5-6年生の一部の児童・生徒は変声期に入り、変声期ののどを保護する知識を浸透させるべきである。

- ・児童・生徒が音楽に興味や関心を持ち続けさせるように導いてあげる。

- ・音楽を知覚・感受と鑑賞能力を育成し、初歩的に良好な音楽鑑賞の習慣を身につける。

- ・自信を持って、表情を持って歌うことができ、演奏とその他の音楽の表現、創造活動に参加することを喜ぶ。

- ・芸術的想像力と創造力を育成する。

- ・楽観的な態度と友愛的な精神を育成し、集団意識を強め、合作能力を育成する。

### 3. 7-9学年

児童・生徒の生理・心理はだんだん成熟し、参加する意識と付き合いの願望は強めて、知識と情報を得る道は増えて、学習の上で自分の初歩的な経験を形成して、感情を表

現する方式は1-6年生よりも明らかな変化がある。多様な形式の芸術実践活動を通じて、音楽を表現する基本的な技能を強固にし、向上させる。音楽鑑賞の範囲を拡大し、音楽の人文内包をより意識的に教育に溶け込ませる。7-9年生は変声期にあり、のどの保護にしなければならない。

- ・児童・生徒が音楽に興味や関心をだんだん強くように導いてあげる。
- ・音楽への知覚・感受と評価・鑑賞の能力を高め、良好な音楽鑑賞習慣を身につける。
- ・自信を持って、感情的に歌うことができ、積極的に演奏と創造活動に参加し、音楽を表現する能力を発展させる。
- ・芸術の想像力と創造力を豊かにさせ向上させる。
- ・豊かな生活情緒と楽観的な態度を育成し、集団意識を強化し、協力と協調能力を鍛える。

### 第三部分 課程の内容

課程の構造とフレームワーク

分野一：感受と鑑賞

音楽の表現要素

音楽の情緒と感情

音楽のジャンルと形式

音楽の風格と流派

分野二：表現

歌う

演奏

総合的な芸術表現

読譜

分野三：創造

音響と音楽を探索する

即興創造

実践と創作

分野四：音楽と関連文化

音楽と社会生活

音楽と姉妹芸術

音楽と芸術以外の他の学科

#### 一 感受と鑑賞

感受と鑑賞は音楽学習の重要な分野であり、音楽学習活動全体の基礎であり、児童・生徒の音楽審美能力を育成する有効な道である。良好な音楽感受能力と鑑賞能力の形成は、児童・生徒の感情を豊かにし、文化素養を高め、心身の健康を増進することに重要な意義を持ち、教育の中で児童・生徒の音楽鑑賞の興味を奮い立たせ、児童・生徒が聴いた音楽に対して自分自身の感受と見解を表現することを奨励し、音楽を聴く習慣を身につけ、音楽を鑑賞する経験を徐々に蓄積していかなければならない。

##### 1. 音楽の表現要素

###### ① 1-2 学年

- ・自然界や生活における各種の声と音声を聞き取る。自分の声あるいは打楽器を用いて好きな響きを模倣する。
- ・歌う時の子どもの声と女声、男声の音色を聴いて辨别することができる。

・楽器の音を感じ取る。よく見かける打楽器の音色を聴いて辨别することができる。その打楽器を用いて強弱、長さが異なる音を演奏できる。

・音楽の強弱、速度の変化を感じて述べることができる。そして、2拍子、3拍子の音楽に対して相応の体感反応をすることができる。

###### ② 3-6 学年

・自然界や生活における各種の音響を発見することができる。そして自分の声あるいは楽器を用いて好きな響きを模倣できる。よく知っている歌や曲のメロディを歌うことができる。

・歌う時の異なる類型の女声と男声を聴いて辨别することができる。人声の分類を言うことができる。よく見かける中国民族の楽器と西洋楽器を認識し、その音色を聴いて辨别することができる。

・音楽のリズムとメロディーの流れを感じ取る過程で、初歩的に拍の違いを辨别することができる。2拍子、3拍子、4拍子の律動感を体験することができる。

・旋律の高さ、速さ、強弱を辨别することができる。音楽のテーマ、フレーズを聴いて辨别することができる。そして身体表現や線、色を運用して相応しい反応できる。

###### ③ 7-9 学年

・自然界や生活における様々な音響を探索し、異なる方法で異なる音を模倣することができる。

・人の声、楽器の音に対する理解と体験を深め、様々な人の声とよく見られる楽器の音色の特徴を言うことができる。

・強弱、速度、音色、リズム、拍、旋律、調、和声などの音楽表現要素を知覚する過程で、自分の体験に基づいて音楽要素の表現作用を言うことができる。

・音楽構造を知覚する、聴いた音楽の異なる段落の対比や変化を簡単に述べることができる。

##### 2. 音楽の情緒と感情

###### ① 1-2 学年

・異なる情緒の音楽を体験し、それに相応しい身体表現を自然な表情で表すことができる。

・音楽の情緒を体験し、共通点と相違点について述べる。

###### ② 3-6 学年

・異なる情緒の音楽を聴いて辨别し、簡単に述べることができる。

・音楽の情緒の変化を体験し、簡単に述べることができる。

###### ③ 7-9 学年

・音楽が表現された様々な感情を意識的に体験することができる。そして、音楽用語を用いて述べるすることができる。

・音楽感情の発展変化を体験し、簡単に説明したり、さまざまな形式で表現したりすることができる。

##### 3. 音楽のジャンルと形式

###### ① 1-2 学年

・子どもの歌を聴き、音楽イメージが鮮明で、フレーズが短い行進曲、舞曲及びその他のジャンルの音楽の一部を聴く。

・模唱や打楽器を用いて聴いた音楽に反応することができる。行進曲や舞曲の音源に合わせて歩く、踊ることができる。

る。

② 3-6 学年

・子どもの歌、賛歌、抒情歌曲、叙事歌曲、芸術歌曲、ポピュラーなど各種のジャンルの歌や曲を聴く、音源と一緒に小さな声で歌う或いは黙唱することができる。

・異なるジャンルの短い器楽曲を聴いて、短い音楽のテーマやテーマの一部を音源と一緒に小さな声で歌うことができ、律動や打楽器を通じて聴く音楽に反応することができる。

・初歩に短い歌や曲の音楽ジャンルと形式を辨别することができる。音楽のテーマを聴いて曲名を述べることができる。

③ 7-9 学年

・合唱、組曲、室内楽、協奏曲、交響曲、オペラ、舞踊劇音楽とその他のジャンルの曲や楽曲を聴く、音楽テーマを音源に合わせて小さな声で歌うことができ、適切な形式で聴く音楽に反応することができる

・音楽を鑑賞することによって異なる音楽のジャンルと形式を辨别する。音楽のテーマの音源を聴き、曲名と作曲者を言い出すことができる。

・聴いた音楽と結びつけ、音楽のジャンルと形式が音楽表現における役割を理解する。

4. 音楽の風格と流派

① 1-2 学年

・異なる国家、地域、民族の子どもの歌、童謡及び短い器楽曲或いは楽曲の一部を聴いて、異なる風格を初歩的に感じ取る。

② 3-6 学年

・中国の民族・民俗音楽を聴き、代表的な地域と民族の民謡、民俗歌舞、民俗の器楽曲と京劇を代表とする中国の戯曲や曲芸音楽（語り物）を了解し、その異なる風格を体験する。

・世界の一部の国家の民族・民俗音楽を聴き、音楽の異なる風格を感じ取る。

③ 7-9 学年

・中国の民族・民俗音楽を聴き、その異なる地域の特徴や民族風格を簡単に述べる、戯曲、曲芸の主要な種類と代表人物を言うことができる。

・世界の一部の国家の民族・民俗音楽を聴き、その風格の特徴を簡単に述べることができる。

・世界の異なる国家の優れた音楽作品を聴き、主要な音楽流派の代表人物を言うことができる。

二 表現

表現は音楽を学ぶ基礎的な内容であり、児童・生徒の音楽の審美能力を育成する重要な道である。教育の中で児童・生徒が自信を持ち歌う、演奏する能力、総合的な芸術表現能力、及び音楽聴覚を発展させた上での読譜能力を育成することに注意しなければならない。

音楽実践活動を通じて、児童・生徒が音楽の形式で自身自身の感情を表現し、他人と一緒にコミュニケーションし、感情を融和させることを促進する。

1. 歌う

① 1-2 学年

・子どもの歌、童謡、及び他の短い歌を学び、歌う表現活動に参加する。

・正しい姿勢、自然な声を用いて、表情を持って一人で歌うことができ、或いは合唱に参加する。

・指揮者の動作に反応できる。

・曲の情緒を異なる強弱と速度で表現することができる。

・毎学年に4-6曲を黙唱することができる(その中で中国民謡は1~2曲を含む)。

② 3-6 学年

・各種歌う表現活動を楽しみに参加する。

・正しい姿勢や呼吸方法を用いて歌うことができ、良好な歌う習慣を養う。

・自然な声、正確なリズムや音調で、表情的に一人で歌うことができ、或いは斉唱、輪唱、合唱に参加することができる。また、指揮者の動作に適切な反応を行うことができる。

・変声期のどの保護の知識を了解し、初歩的などの保護の方法を知っている。

・自分や他の人の歌うことを簡単に評価することができる。

・毎学年に4-6曲を黙唱することができる(その中で中国民謡は1~2曲を含む)。京劇や他の地域の戯曲の節回し一部分を歌うべきである。

③ 7-9 学年

・各種歌う表現活動を積極的に参加し、良好な歌う習慣を身につける。

・自信を持ち、感情的に歌うことができる。合唱で歌う経験を積み、さらに合唱の芸術的魅力を感じる。基本的な指揮図形を学習し、指揮者からの曲の初め、終わり、表情などの指示に正確な反応を行うことができる。

・変声期のどの保護の知識を学び、どの保護の方法を知っている。

・簡単に曲の特徴と風格を分析し、曲の情緒とイメージを表現することができる。自分や他の人や集団の歌うことを簡単に評価することができる。

・毎学年に2-4曲を黙唱することができる(その中で中国民謡は1曲を含む)。京劇や他の地域の戯曲の節回し一曲を歌うべきである。

2. 演奏

① 1-2 学年

・授業でよく見られる打楽器を学び、演奏活動に参加する。

・打楽器や他の音響材料を合奏することができる、或いは歌うに伴奏する。

② 3-6 学年

・各種演奏活動を楽しみに参加する。

・授業でリコーダー、ハーモニカ、鍵盤ハーモニカ、或いは他の楽器の演奏方法を学習し、歌や曲の表現に参加する。

・良好な演奏習慣を養う。自分や他の人の演奏することを簡単に評価することができる。

・毎学年に楽曲1-2曲を演奏することができる。

③ 7-9 学年

- ・各種演奏活動を積極的に参加し、良好な演奏習慣を身につける。
- ・一つの楽器を選択し、適切な演奏方法を用いて楽曲の情緒を表現し、その上美しい音色で演奏することを図る。
- ・自分や他の人や集団の演奏することを簡単に評価することができる。
- ・毎学年に楽曲 2-3 曲を演奏することができる。

3.総合的な芸術表現

① 1-2 学年

- ・総合的な芸術表現活動に参加することができる。
- ・歌や曲に合わせて身体で動くことができる。
- ・他の人と協働して、一緒に律動、集団ダンス、音楽遊び、児童歌舞などの表現活動を行うことができる。

② 3-6 学年

- ・総合的な芸術表現活動を積極的に参加することができる。
- ・ストーリー性がある音楽実演活動（例えば児童歌舞劇）に参加し、役柄を演じること。
- ・自分や他の人の表現することを簡単に評価することができる。

③ 7-9 学年

- ・自信を持ち、感情的に総合的な芸術表現活動に参加することができる。
- ・学んだ歌や曲に合わせて簡単な演劇を作り、或いはその歌や曲と一緒に身体表現をすることができる。
- ・簡単なオペラ、ミュージカル、京劇や他の戯曲、曲芸の一部を学び、自分や他の人の表現することを簡単に評価することができる。

4.読譜

① 1-2 学年

- ・簡単なリズム記号を認識し、また、声、言語、身体動作を用いて簡単なリズムを表現することができる。
- ・階名で簡単な楽譜を歌うことができる。

② 3-6 学年

- ・学んだ歌と合わせて音名、音符、休符及びいくつか常用の音楽記号を認識する。
- ・ピアノ伴奏に合わせて簡単な楽譜を視唱ことができ、初めに読譜能力を持つ。

③ 7-9 学年

- ・ピアノ伴奏やデジタル音源に合わせて楽譜を視唱することができる。
- ・読譜能力を持ち、比較的順調に楽譜を読むことができる。

三 創造

創造は児童・生徒の想像力と思考の潜在能力を発揮する音楽学習分野であり、児童・生徒が音楽創作実践と創造的な思考能力を発掘する過程と手段であり、革新人材の育成を非常に重要な意義を持っている。音楽創造には2つの種類の学習内容が含まれている。一つは児童・生徒の潜在能

力の開発を目的として即興音楽創造活動で、二つ目は音楽材料を用いた音楽創作を試みと練習を行うことである。

1.音響と音楽を探索する

① 1-2 学年

- ・人の声、楽器音を用いて自然界或いは生活中の声を模倣することができる。
- ・打楽器或いは発声材料を探して音の強弱、長さ、音色を探索することができる。

② 3-6 学年

- ・人の声、楽器音及び他の声材料を用いて自然界或いは生活中の声を表現することができる。
- ・教師の指導によって自分で簡易な楽器を作ることができる。

③ 7-9 学年

- ・人の声、楽器音及び他の声材料を用いてある場面を表現することができる。
- ・自分や他人が行った声の探索活動を簡単に評価することができる。

2.即興創造

① 1-2 学年

- ・童謡、詩詞、文句に異なるリズム、速度、強弱を加えて表現することができる。
- ・歌を歌ったり、聴いたりするときに即興的に身体を動かすることができる。
- ・即興的に授業で学んだ楽器や他の声材料を用いて音楽物語や音楽遊びに合わせることができる。

② 3-6 学年

- ・歌の情緒に合せる律動やダンスを即興で創作する、そして作品の表現に参加する。
- ・各種音声材料及び異なる音楽表現形式によって、即興で音楽物語、音楽遊びを創作して、そして作品の表現に参加する。

③ 7-9 学年

- ・即興的に生活中の慣用句或いは詩詞を創作して、歌うことができる。
- ・歌や曲の内容及び情緒に応じて、即興的な創作表現活動を行うことができる。

3.実践と創作

① 1-2 学年

- ・線、色、形を運用して、感じた音楽を記録することができる。
- ・人の声、楽器や他の声材料を運用して、教師の指導によって1-2小節のリズムを作成することができる。

② 3-6 学年

- ・教師の指導によって、楽譜を用いて声や音楽を記録することを試みる。
- ・教師或いは教材から提供する材料や方法を利用して、一人で或いは他の人と協働して2-4小節のリズム或いはメロディを創作することができる。

③ 7-9 学年

- ・教師或いは教材から提供する材料や方法を利用して、一人で或いは他の人と協働して4-8小節のメロディ或いは短い曲を創作することができる。そして、その作品を楽譜で記録することができる。
- ・パソコンによる音楽創作を試みる(パソコンがある地域適用)。

四 音楽と関連文化

音楽とその関連文化は音楽授業の人文学科の属性を集中的な体現で、児童・生徒の文化素養を直接増進する学習分野である。それは、音楽文化視野を拡大し、音楽に対する体験と感受を促進し、音楽を鑑賞・表現・創造及び芸術の審美能力を高めることに役を立つ。一方、この教育内容は、相対的な独立性を持っているが、より多くの場合には音楽鑑賞・表現・創造活動の中に含み持たっている。具体的な音楽作品や生き生きとした実践的な音楽活動に効果を求め、この分野の教育目標を実現するのであろう。

#### 1.音楽と社会生活

##### ① 1-2 学年

- ・生活中の音楽を感じ、その上楽しんで他の人と一緒に音楽活動に参加する。
- ・放送、映像、インターネット、テープ、CDなどのメディアを通じて音楽を聴き、鑑賞することができる。
- ・地域や郷土の音楽活動に参加できる。

##### ② 3-6 学年

- ・日常生活の中の音楽に注目する。
- ・放送、映像、インターネット、テープ、CDなどの放送メディアから音楽材料を集め、またその資料をよく聴き、鑑賞する。
- ・地域や郷土の音楽活動を積極的に参加できる、その上に他の人と音楽のコミュニケーションを行うことができる。

##### ③ 7-9 学年

- ・音楽に注目する習慣を身につけ、それから音楽における社会生活の役割を実例で説明することができる。
- ・放送メディアやライブから音楽を楽しんで聴くことができ、音楽情報を収集・蓄積することができる。収集した音楽材料と他の人と交換し、聴いた音楽の感受をコミュニケーションの願望がある。
- ・地域や郷土の音楽活動に積極的な参加する。その活動に自分の評価を行うことができる。

#### 2.音楽と姉妹芸術

##### ① 1-2 学年

- ・簡単な身体の動作を用いて、音楽リズムに合わせることができる。
- ・簡明な演技動作を用いて、音楽の情緒を表現することができる。
- ・色或いは線を用いて音楽に対して異なる感受を表現することができる。

##### ② 3-6 学年

- ・演劇とダンスを見て、初めにその中における音楽の役割を認識する。
- ・よく知っている映画に合わせて、初めにその中における音楽の役割を感じる。

##### ③ 7-9 学年

- ・芸術作品を通して、聴覚芸術と視覚芸術の表現材料や表現特徴の共通点と相違点を簡単に比較することができる。
- ・よく知っている映画に合わせて、その背景音楽やテーマ音楽に対する認識を述べることができる。
- ・総合芸術表現手段を用いて、他の人と協力してクラスによって芸術活動の提案と設計を行うことができる。

#### 3.音楽と芸術以外の他の学科

##### ① 1-2 学年

- ・音と日常生活現象及び自然現象との関連を挙げる。
- ・異なるリズム、拍、情緒の音楽を用いて簡単な体操の動作を合わせる。

##### ② 3-6 学年

- ・適切な背景音楽を選んで、童謡、童話や詩の朗読のために音響効果を添える。
- ・異なる歴史時期、地域や国家の代表的な音楽作品を言う。

##### ③ 7-9 学年

- ・音楽が情緒への影響を簡単に述べることができ、そして適切な音楽を用いて自己の気持ちを調節することができる。
- ・音楽芸術と言語芸術の関係を理解し、適切な音楽を選択し、詩詞、散文への感じを引き立たせることができる。
- ・音楽作品への理解を深め、中国と世界の一部の国家の代表的な歌或いは曲及び関連する人文風俗を言う。

#### 第四部分 実施と提案

##### 一 教育の提案

本『標準』の実施を保証するために、教師は『課程標準』の基本理念を深く理解し、音楽を本とし、児童・生徒を本とし、その上で課程の価値と課程目標を全面的に実現しなければならない。

##### 1.教育において注意すべきいくつかの問題

##### ①聴覚芸術の知覚・感受の法則に従い、音楽学科の特徴を際立つようにする

音楽は聴覚芸術であり、聴覚体験は音楽を学ぶ基礎である。児童・生徒の音楽聴覚を発達させることは音楽教育のすべての活動に貫かなければならない。

教師は児童・生徒を導いて音楽を好きにならせ、音楽に対する理解を深め、作品に含まれている音楽の美しさを十分に発掘し、自分の音楽に対する悟りで児童・生徒の感情の共鳴を奮い立たせなければならない。音楽教育の技能を絶えずに向上させ、自分の歌声、楽器の音、言語と動作で、音楽の美しさを児童・生徒に伝えなければならない。生き生きとした形式で教育を行い、思想品德の教育内容を音楽実践活動の中に寓し、児童・生徒に芸術の雰囲気の中で審美の喜びを得させ、美で人を感動させ、美で人を育成しなければならない。

音楽審美を核心とするのは小中学校の音楽教育の最も基本的な理念である。その理念は個々授業分野に浸透すべきである。音楽の感受と鑑賞、表現、創造及び音楽と関連文化の学習を通じて、児童・生徒の美的感覚を育成し、審美体験からの情感を豊かにし、美的事物の想像力を発達させ、美的教育の理念を深め、効果的に児童・生徒の音楽の審美能力を高める。

##### ②教育目標の設計と統合を重視する

教室の教育目標の設計を重視し、目標を緊密にめぐって音楽教育活動を展開しなければならない。教育形式の選択は教育目標に従うべきで、どんな教育方法と手段を採用しても、明確な目標性と目的性を持っていなければならない。

音楽教育目標の設計は3つの次元の統合と有機的なつながりを体現し、感情、態度と価値観の正確な導きを重視し、過程と方法の教育体現に注意し、同時に知識と技能の目標達成を明確にしなければならない。

##### ③音楽授業の各分野の有機的な関係を注意する

本『標準』で設定された4つの音楽教育分野は、相互に関連し、相互に浸透する全体である。教師は音楽教育の各分野の内容要求と相互関連を全面的に理解し、掌握し、教育の中でそれを有機的な全体に融合させ、児童・生徒の音楽素養を全面的に向上させなければならない。

例えば「感受と鑑賞」は「音楽と関連文化」を含み、音楽表現の過程は同時に音楽感受と育成、創造力を展示する過程でもある。音楽感受と鑑賞能力の向上は、音楽の表現を豊かにし、音楽創造力の発展を促進することができる。同様

に、「音楽と関連文化」も音楽鑑賞、表現、創造活動の中でこそ、本当に理解され、体現されることができる。

#### ④授業における各種関係を正確に対応する

授業における、授業設計の思い込み機能を重視し、授業を形成する過程の意義を重視する。教師が書いた教案の価値方向に注目し、授業環境、資源の客観的な変化に注目する。そして、授業過程における、児童・生徒が参加することに強調し、教師からの伝授も必要である。それは探究式学習方法を提唱しても、適切な受容性学習もあるべきである。授業中には集団的協力的学習を提唱しても、個体の学習の特徴と優勢を發揮することも重視するべきである。

児童・生徒は教育活動の主体であり、その自分自身の学習の主体性を十分に發揮すべきである。教師は児童・生徒と音楽をコミュニケーションする架け橋であるの授業の組織者や指導者として、授業過程において民主的、平等な教師と児童・生徒の関係を構築し、その関係における児童・生徒の主体的地位と教師の主導的な役割を強調し、授業過程中的の師生をコミュニケーションすることに増強する。

#### ⑤積極的に児童・生徒を音楽実践活動に参加することを導く

授業において、児童・生徒を積極的に聴く、歌う、演奏、創造及び総合的な芸術表現活動などの実践活動に参加するように導く、音楽をよく聴き、歌をよく歌う、楽器をよく演奏する、楽譜をよく読むように導く、それから絶えず音楽実践経験を蓄積するべきである。そして、音楽教科書、音響・音源及びインターネットなどの方法を有効に利用し、児童・生徒がよく考え、よく実践の意識と習慣を育成し、有効に児童・生徒の音楽実践能力を有効に向上するようにする。

#### ⑥合理的に現代的教育技術手段を運用する

インターネット技術を代表とする現代的教育技術は音楽教育の幅を拡大し、教育手段と教育資源を豊富にする、それに音楽教育を運用することが広い将来性を持っている。音楽科教師は合理的に現代教育技術の視聴覚を結合し、音響・映像を一体とし、教育資源を豊富にしなどの利点を利用して、授業に良い効果を提供すべきである。児童・生徒が映像、ラジオ、インターネットを用いて音楽を学ぶことができる指導を強化するべきである。現代の遠隔教育中の音楽授業資源をよく利用して授業を行う、それで授業の質を向上することに努力する。

#### ⑦地域によって本『標準』を適切に実施する

我が国は広くで人口数が多い多民族国家であり、各地域、民族、都市、農村の間に格差がある。各学校と教師は地元と本民族、本校の具体的な状況を結合し、地域特徴の課程資源を十分に利用し、良好な学校内外の音楽学習環境を構築し、地域文化と民族文化の特徴を持つ教育内容を豊富にし、地域によって各授業分野の課程内容の弾力性範囲を適切に把握すべきである。

### 2.授業内容に関する提示

#### ①感受と鑑賞

この部分の授業については音楽を根本とし、音の響きから音楽を鑑賞することを主要とすることに注意すべきである。教師の説明と提示には、簡明的、生き生きとしており、啓発性に富んでいるが必要。多様な形式を採用して児童・生徒を積極的に音楽体験に参加させ、その体験で彼らの連想力と想像力を引き起こすべきである。また児童・生徒の独立的感じと見解を尊重し、自分の審美体験を勇敢に表現することを奨励し、それから音楽鑑賞の興味を刺激し、次第に音楽を聴く良い習慣を身につけ、音楽を感受と鑑賞する経験を蓄積する。

#### ②歌う

歌を歌うことは小中学校の音楽授業の基本的な内容であ

り、児童・生徒に最も受け入れやすく、楽しんで参加する表現形式でもある。課程内容における歌う姿勢、呼吸方法、リズム、音調の高さなどへの要求を重視する必要がある。歌うの練習は、歌う実践活動に合わせて行うべきである。歌の表現内容に相応しい授業現場を創造し、児童・生徒が感情的な歌うことを刺激する。また変声期のどの保護に注意して、間違い発声法をしないようにするべきである。

授業中に合唱の部分をも更なる重視し、授業内容を強調する。授業を受けるから多声部音楽の豊かな表現力を感じさせ、できるだけ早く他の人と協力して歌う経験を蓄積し、集団意識と協調・協力能力を育成するべきである。合唱授業は輪唱から始まり、徐々に他の多声部合唱形式に移行することができる。

歌う授業は全ての児童・生徒が参加する積極性を引き出すことに注意し、歌うの自信心を育成する。彼らに歌う表現における美的体験を享受させ、美的薫陶を受けさせる。

#### ③演奏

器楽演奏には、児童・生徒が音楽学習する興味を刺激し、音楽に対する理解、表現、創造能力を向上させるために重要な役割を果たしている。器楽演奏は歌う、鑑賞、創造などの授業内容と緊密に結合すべきである。例えば、楽器を用いて歌の伴奏になり、鑑賞曲の一部を演奏する。各種演奏形式を採用し、児童・生徒が授業で学習した楽器合奏を主体とし、自分自身の条件やそれぞれの興味から、普遍的な参加することで自分の特長を発達させるように奨励する。

授業で学んで楽器は、学習しやすく、演奏しやすく、集団で一緒に学習しやすく特長がある楽器を用いるべきである。授業中に使用する吹奏楽器は必ず衛生標準に符合し、音質がよい、音の高さが正確である。大きすぎる音量や騒音が児童・生徒の聴力や健康に与える被害を避けるように気をつける。なお、地域や民族によって小中学校の音楽授業にその地域や民族適した楽器を選択して学習する。楽器演奏を学んでいる上で児童・生徒が自分で楽器作成するように奨励して、指導する。

#### ④読譜

楽譜は音楽を記載する記号であり、音楽を学習するための基本的なツールである。児童・生徒には簡単な読譜能力がある要求され、それは音楽鑑賞、表現、創造などの実践活動に参加するのに有利である。読譜は、歌う、演奏、創造、鑑賞などの授業内容と緊密に結合し、音楽を担体として、児童・生徒の感性と認知を蓄積することに基づいて行う。読譜授業は児童・生徒がよく知っている歌や曲でもよいし、楽器演奏によって学習することも可能である。

数字譜と五線譜は我が国が現行の2種類の主要な楽譜形式であり、各地域、学校は授業中に実際の状況に応じて自分で選択することができる。その中で五線譜は移動ド唱法を採用することを提案する。

#### ⑤創造

教師は児童・生徒の創造力を育成することを、異なる授業分野に貫く。音楽授業の各種実践活動は、児童・生徒に創造性の潜在能力を開発する空間を提供している。異なる児童・生徒が同じ曲を聴いていると、異なる理解が生じる可能性がある。そして同じ曲を歌うにも、様々な表現方法がある。同じ練習を終えると、様々な方法や答えもある。音楽実践における創造過程を重視し、児童・生徒の想像力と創造力を十分に發揮し、「標準答え」や「統一モード」で束縛しないようにする。

### 二 評価の提案

音楽授業の評価は素質教育を全面的に推進する精神を十分に体現し、本『標準』で述べた課程理念を貫徹し、評価

の診断、激励、改善の機能に着目すべきである。科学的な授業の評価を通じて、児童・生徒が自分自身の進歩を了解し、学習の自信と原動力を増強し、課程の授業の質を向上に促進することに有利である。

#### 1. 評価の内容

児童・生徒に対する評価は授業の評価の主要な方面であり、本『標準』中の各授業分野の課程内容を基本的な根拠とし、授業内容に関連する情感・態度と価値観、過程と方法、知識と技能その三つの方面の要求を全面的に考察すべきである。例えば、児童・生徒が音楽に対する興味と情感反応。そして音楽実践活動における参加する態度、程度、協力の願望及び協調能力。また音楽を学習する方法と効果、体験と感受の能力、音楽の表現と創造の能力、他の関連文化に対する認識と理解、美的な情緒の形成及び知識、技能の実際レベルなどを把握する。

#### 2. 評価の方式と方法

##### ① 形成的評価と総括的評価を組み合わせる

形成的評価は、児童・生徒の学習過程における情感、態度、方法、知識、技能の発展変化の評価であり、日常授業では観察、会話、質問、議論、歌う、演奏などの方式を採用して行うことができる。総括的評価は、児童・生徒の段階的な学習成果の評価であり、学期や学年の末に行われ、主に聴く、歌う、演奏、総合的な芸術表現などの方式を採用されている。

##### ② 定性評価と定量評価を結合する

定性評価は一つ記述性の質的评价である。主に児童・生徒が音楽学習における情感・態度と価値観、過程と方法、及び知識と技能の次元の三つの部分の中に具体的などの程度があるか確認することが困難な内容に適している。例えば、音楽に対する興味、情感の反応、実践活動への参加や他の人との協調やコミュニケーション、音楽の鑑賞と知覚・感受、集団で協力による歌う表現や創作活動などの授業中の表現から、比較的正確な記述性文字を用いて定性評価をすることができる。

定量評価は、異なる授業分野の課程内容中のレベルの要求に対するどの程度が完成するとの評価である。例えば、音楽の表現要素への認知と把握程度、音楽のジャンル、形式、風格、流派への辨別、音楽のテーマを聴いて曲名を言う、歌を黙唱できる及び曲を演奏できるの量、読譜の程度などを定量評価をすることができる。

##### ③ 自己評価、相互評価、及び他の人からの評価を結合する

児童・生徒の自己評価は記述性評価を主とし、自己の発展状況を縦からに比較することに重点を置くべきであり、「音楽成長記録帳」の形式で児童・生徒の自己評価を記載することができる。その記録帳から異なる段階の回顧と比較から自分の進歩を見ることができる。同級生からの相互評価はグループで演奏会、音楽演劇或いは創作作品などの形式を採用し、見学のコミュニケーション中で相互評価をすることができる。教師による児童・生徒の異なる学習段階の「音楽成長記録帳」の評語及び音楽聴き取り、生演奏などの形式による評価は、彼の人からの評価を行うために選択可能な有効な形式である。

「クラスのコンサート」は音楽授業の特色がある生き生きとした評価方式であり、音楽課程の特徴と授業評価の民主性を十分に体现し、調和、団結の雰囲気で作成することができる。「クラスのコンサート」或いは他の活動を通して、児童・生徒の歌う、演奏、音楽作品、音楽感想発表会、公演写真、録音、映像などを展示し、相互交流や相互激励を目的と達成している。

以上の各種形式の評価は、児童・生徒の進歩と成績を十分に肯定し、また、学習の過程中的の問題と不足及び改善方法を探し出す、それに児童・生徒の発展を促進することに

役立つべきである。

### 三 教材の作成提案

教材を作成するには本『標準』を根拠とし。音楽教材には、児童・生徒用教科書とそれにつけた音響・映像教材および教師用の参考資料を含む。

#### 1. 教材を作成する原則

##### ① 児童・生徒は根本とする原則

児童・生徒の興味、能力と需要から出発し、彼らの生活経験を結合し、生理・心理及び美的事物の認知規則に従い、学習を中心として、音楽を感受し、表現し、創造し及び音楽文化知識を学習する機会を提供し、児童・生徒が音楽を一生に愛好する及び音楽の審美素質を高めるために基礎を築く。

##### ② 教育性の原則

教材は思想性と芸術性を有機的に結合し、音楽教育の規則を体现する、その中に思想・道徳教育を浸透させるべきである。

##### ③ 科学性の原則

音楽の知識及び技能の正確性、厳格性に注意する。児童・生徒の音楽学習の認知規則に符合する。

##### ④ 実践性の原則

教材は実践活動の設計を重視すべきである。教材の難易度、程度は多数な地域の音楽教育レベルに適応するべきである。それは全体児童・生徒が実践活動に参加することに役立つ。

##### ⑤ 総合性の原則

教材は音楽文化の内包を発掘することに注意し、音楽文化と姉妹芸術及びその他の関連文化との関係を強化する。

##### ⑥ 開放性の原則

伝統と現代、中国の民族音楽文化と世界の多文化の関係を正確に処理し、時代感を持ち、現代的な雰囲気や富んだ優秀な作品の吸収に注意し、社会生活と緊密に関連し、教材の内容を豊富にし、児童・生徒の音楽視野を広げる。

#### 2. 教材内容の編纂提案

① 教材の選択された曲の中で、伝統音楽、一つ楽器のために作られた古典的な作品、優れた新作品などがうちでも割合を占めるべきである。また、中国と外国の作品の割合は適切になるべきである。教材選択は、鑑賞、歌う、演奏、創造性活動などの内容の総合的な運用に有利であり、音楽と関連文化を相互に浸透させる。

② 音楽の基礎知識と技能の授業内容は音楽審美と有機的に結合すべきである。そして、音響教材は歌の歌う実例、伴奏、鑑賞曲、実践例及び教師が選択できる一定数の備用曲を含むべきである。

③ 選択された教材の難易度、内容の程度は適度するべきである。

④ 教師用参考書は授業目標、教材分析、教育提案及び関連参考書などを含むべきである。内容を編纂することは、授業の規範性にも有利であり、教師の主導性と創造性の発揮にも有利である。

### 3.教材提示形式の提案

- ①児童・生徒用教科書は文章と写真を豊かにし、内容は生き生きして活発である。文字は簡明で、趣味性と可読性に富んでおくべきである。
- ②教師用参考資料は、文字で記述された教師用の参考書以外のそのほかの ICT 教材を開発することが提唱されている。
- ③音響・映像教材は教科書の内容と緊密に繋がり、多様なカバー（例えばテープ、ビデオ、CD、VCD、MP3、MP4 など）を用いて提示するべきである。演歌、演奏、録音などの音響・映像教材の効果は良好な品質を持つべきである。

### 四 課程資源の開発と利用提案

1.本『標準』とこれに基づいて作成された教材は音楽課程の最も重要な基本資源である。学校は教師を組織して本基準を真剣に学習し、国家教育主管部門の審査を経て通過した教材(児童・生徒用教科書、音響、音像教材及び教師用参考書を含む)を選択し、本基準と教材に基づいて丹念に、創造的に音楽教育を実施しなければならない。

2.地方教育委員会と学校はその地域の人文・地理環境と民族文化の伝統を結合し、地域、民族、学校の特色がある音楽の課程資源を開発すべきである。地元の民族・民俗音楽(特に無形文化遺産中の音楽プロジェクト)を音楽授業に活用することをよくにし、児童・生徒が小さい頃から民族の音楽文化の薫陶を受け、民族の音楽文化を伝承する意識を確立させる。

3.音楽教育の施設は課程目標を実現する保証である。異なる学段の教育需要に応じて、音楽専用教室、専用設備と合奏を実施するために必要な授業楽器、例えばピアノ、オルガン、アコーディオン、鍵盤、放送機器、常用の打楽器、民族楽器、西洋楽器及び ICT 教育設備などを配置すべきである。

学校図書館と教育研究委員会は音楽書籍、雑誌、映像資料などを購入し、これを教師の授業準備、研修と研究に使用すべきである。学校の閲覧室も音楽に関する本、雑誌と映

像資料を配備し、児童・生徒が資料を収集、閲覧して使用するべきである。

4.学校の放送局、テレビ局、ホームページは音楽教育の重要な資源の一つであり、授業に合わせて、健康的に向上した音楽を放送し、児童・生徒の音楽文化の視野を広げ、良好なキャンパス文化の雰囲気形成する。家族やインターネットを含む社会中の音楽資源が児童・生徒の音楽興味、美的情緒に与える影響を重視すべきである。そのため、一方で健康的に向上した音楽文化生活を積極的に誘導する、もう一つは低俗、不健康な負の情報が児童・生徒に与える消極的な影響を防ぐ必要がある。

5.児童・生徒の授業以外の芸術活動は音楽の課程資源の重要な構成部分であり、音楽教師は学校に協力して児童・生徒の授業時間以外の芸術クラブを組織し、各種の祝日、記念日、少先队(共産党系の少年団体)及び共青团(共産党系の少年団体)の活動の日を利用して、朗読大会、芸術活動、教師と児童・生徒のコンサート或いは音楽講座などを組織し、児童・生徒を民族精神を発揚させ、集団意識を増進させ、道徳素養を高めることを導く。学校はこのような活動を年間教育計画に取り入れ、教師の仕事の中に入れて、また場所、設備、経費などの面で支援と保証を提供するべきである。

6.様々な形式の音楽と音楽教育交流活動(教師の育成訓練を含む)は、課程資源と情報のコミュニケーションを効果的に促進することができる。学校は教師がこれらの活動に参加することをサポートすると同時に、現代の情報技術(例えばネットワーク)を積極的に開発し、利用して課程資源を豊富にしなければならない。

### 謝辞

本資料の作成にあたり、和訳のチェックと細部のご助言をくださった友人の京都大学大学院文学研究科の樊慧慧さんと干場直さんに心から感謝いたしたいと思う。

<sup>1</sup> 呉非「中国と日本の小学校音楽科カリキュラムの比較研究：1947年から2001年までの国定カリキュラムを中心として」『広島大学大学院教育学研究科音楽文化教育学研究紀要』17, 広島大学, 2005年, pp.51-57。

<sup>2</sup> 藤雪麗・福田隆真「小学校における中国の課程標準と日本の学習指導要領の比較研究：中国義務教育改革目標の6項目を中心に」『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』第30号, 山口大学, 2010年, pp.57-65。

<sup>3</sup> 孟艷・奥忍「中華人民共和國教育部『全日制義務教育の音楽課程の標準(試行案)』」『岡山大学教育実践総合センター紀要』第4巻, 岡山大学, 2004年, pp.147-161。

<sup>4</sup> 中華人民共和國教育部『義務教育音楽課程標準(2011年版)』, 北京師範大學出版集團, 2012年。

<sup>5</sup> 関連する研究は以下の通り。アルサラン「中国の『音楽課程標準』(2011年版)と日本の『学習指導要領 音楽編』(2017年版)比較研究」『教育学研究紀要』63(1), 中国四国教育学会, 2017年, pp.278-283。